

どのような言葉が人を幸せにするのか

——自由回答のテキスト・マイニング分析を用いた混合研究法アプローチ——

○北海道大学 ホメリヒ カローラ
成蹊大学 小林 盾

1 目的

これまで人びとの幸福に関する研究ではおもに、主観的幸福感のような量的データか、自由回答のような質的データのどちらかが用いられてきた。そこで、この研究発表では混合研究法を用いて、幸福の質的データである自由回答が、量的データである主観的幸福感と、どう関連するのか、というリサーチ・クエスチョンにチャレンジする。

2 方法

データには、「2014年暮らしについての西東京市民調査」を用いる。郵送調査であり、標本は層化2段無作為抽出によって選ばれた。母集団は東京都西東京市在住の22～69歳個人、有効回収数は308人、有効回収率は61.8%だった。分析では、すべての変数に回答した265人を対象とする。幸福について、「全体的にいて、現在、あなたは幸せだと思いますか、それともそう思いませんか」と対象者の幸福度を4段階で判断してもらい、「あなたにとって『幸せ』とは、一言でいうと何ですか」について自由回答で答えてもらった。

3 結果

自由回答は、テキスト・マイニング分析（計量テキスト分析）によって、Layard（2005）の規定要因をもとにした7カテゴリへと割りふられた。幸福として心理的安定をイメージする人が最多で半分以上おり（55.8%）、これに健康（23.8%）、家族（20.8%）、生活観（17.7%）が続いた。カテゴリとカテゴリの共起関係は、とくに心理的安定カテゴリと生活観カテゴリ（共起29人）、家族カテゴリと健康カテゴリ（共起は19人）が、同時に記述されやすかった。次に、主観的幸福感を従属変数とし、カテゴリの有無による平均の比較と、回帰分析を行った。ここから、自由回答で「幸せ」を家族や生活観としてイメージした人ほど幸福を有意に感じていたが、収入・仕事を想起した人の幸福感が有意に低いことがわかった。

4 考察

幸福の自由回答で、家族や生活観をイメージした人ほど、主観的幸福感が高まり、収入・仕事をイメージした人ほど下がった。以上から、家族や生活にまつわる言葉は、いわばアクセルとなって人びとを幸福にし、収入や仕事にまつわる言葉はその逆にブレーキとなっていたことが明らかになった。

文献

小林盾, カローラ・ホメリヒ, 2018, 「どのような言葉が人を幸せにするのか：自由回答のテキスト・マイニング分析を用いた混合研究法アプローチ」『ソーシャル・ウェルビーイング研究論集』4: 31-47.

Layard, R., 2005, *Happiness: Lessons from a New Science*, London: Penguin Press.